

**月例会ダイジェスト【115】**

「介護離職」や仕事と介護を両立する「ビジネスケアラー」の増加は、職場における深刻な課題として顕在化している。12月のさんぽ会では、「介護を“突然”にしない—職場で支える・自分も備える—」をテーマに、2名の専門家を講師に招き、現状の課題整理と企業・産業保健職による支援のあり方を議論した。当日は、江口泰正氏（健康教育推進研究所）、海野賀央氏（㈱JERA）、帰山晶子氏（日野自動車㈱）、安倉紗織氏（ライフコンサルティングスタジオ／順天堂大学）の4名がコーディネーターを務め、ハイブリッド形式で開催された。

最初に登壇した一般社団法人日本介護支援専門員協会 常任理事の能本守康氏は、介護保険制度と家族支援について解説した。介護保険制度は、高齢化や要介護高齢者の増加、家族形態の変化を背景に、医療費の増加を抑える目的で平成12（2000）年4月に施行された在宅介護の社会保障制度であり、「介護を家族だけに任せず社会全体で支える」ことを理念としている。

提供サービスは、訪問介護・訪問看護、通所介護（デイサービス）、短期入所（ショートステイ）、福祉用具レンタルなどの居宅サービスと、特別養護老人ホームやグループホームなどの施設サービスに大別される。介護認定は本人または代理人が市町村に申請し、認定調査と主治医意見書をもとに、1カ月に利用できるサービス量が決定される。

ケアプランは家族も作成できるが、専門職であるケアマネジャー（以下、ケアマネ）の助言を受けることが望ましく、介護認定申請の段階から支援を得るのが理想的とされる。そのため、少なくとも地域包括支援センターの場所は平時から把握しておいてほしいと述べた。また、家庭でどこまで介護を担うかは繊細な問題であり、遠慮せずケアマネに相談してほしいと強調した。さらに、企業と契約し、介護と仕事の両立に悩む従業員を支援する「ワークサポートケアマネージャー」制度についても紹介した。

続いて、社会福祉士・介護福祉士の西出真悟氏（㈱メディヴァ）が登壇し、介護離職の現状や「人生会議（アドバンス・ケア・プランニング：ACP）」について講演した。西出氏は、日本人の多くが人生の最終段階の数年前から介護を受け、その前段階としてフレイル（虚弱）状態を経ると指摘した。特に、フレイルの契機となる「ソーシャルフレイル（社会的虚弱）」に触れ、社会的つながりを保ち、孤独や孤立を防ぐことが要介護状態への移行を遅らせる鍵になると述べた。

講演では、有名人や自身の母親の看取りの経験を交え、終末期における個々の希望を丁寧に聞き取る重要性を強調した。ま

た、6割の日本人が自宅で最期を迎えたいと望む一方、実際に自宅で亡くなる人は2割程度にとどまる現状を示し、このギャップを埋めるには在宅医療の普及と地域包括ケアの推進が不可欠だと訴えた。

さらに、遠方に住む子どもらが本人と積み上げたケアプランを覆してしまう「遠くの親戚問題」にも触れ、その背景には親を思う不安があると説明。家族間で早期に意思を共有し、将来の見通しを立てる手段として、ジェノグラム（家族・親戚関係図）に5年後の年齢を併記して活用することを推奨した。

能本氏は「介護には必ず終わりがある。だからこそ、その後の介護者自身の人生も見据えて行動してほしい」と強調した。一方、西出氏は、介護離職をしてよかったという声は少なく、多くの場合で、金銭的困窮や精神面の負担の増加がみられるケースが報告されており、介護離職は避けるべきだと強く訴えた。

次に、海野氏より介護休業制度の概要が説明され、その目的は厚労省の資料を引用し「従業員本人が介護を行うため」ではなく、「仕事と介護の両立に向けた準備期間」であると解説された。企業が両立支援を行わない場合のリスクは大きい一方、支援によるメリットも多いとして、企業が積極的に取り組む必要性を強調した。

続くディスカッションでは、対応が難しい介護ケースへの向き合い方について意見が交わされた。若年性認知症の事例では、介護保険と障害者福祉の併用、就労支援、ICTの活用などが紹介された。また、身寄りのない難病患者のケースでは、支援の「量より質」を重視し、本人の希望に寄り添いながら孤独感に向き合う姿勢が重要であると指摘された。

質疑応答では、主治医意見書を作成する診療科の選定に関する質問があり、意見書の内容によっては介護度が実際より低く判定される可能性があるため、適切な診療科を選ぶことが重要だと能本氏が述べた。また、在宅医療の選択に関する質問に対し、西出氏は、大学病院に通院している場合でも、地域の事情に詳しい地元クリニックにかかりつけ医を持つことが望ましいと助言した。さらに、介護保険では補いきれない見守りなどの支援については、地域包括支援センターが実施する地域ボランティアのコーディネート事業が紹介された。

最後に、さんぽ会の福田洋会長から「将来、日本の介護は持続可能か」という問いが投げかけられた。これに対し、西出氏は「特に人材不足が懸念される地方では、独自のサービスや特色を打ち出すことが生き残りの鍵」と述べ、能本氏は「ICTを含む大規模な制度改革を行えば、介護は必ず持続できる」と語り、介護の未来に期待を示した。

さんぽ会の詳細は下記サイトをご覧ください。

- ホームページ <https://sanpokai.net>
- FB ページ <http://www.facebook.com/sanpokai>